

第5回

【立春】 春立つ

二十四節気の最初が立春である。節気には三つの意味があり、天文学では定義された瞬間の時刻を、暦ではそれを含む日を、あるいは次の節気、雨水の前日までの期間をさす。立春から立夏の前日までが春で、寒さの頂点を過ぎて立春から時候の挨拶に余寒を使う。

一九四七年、ニューヨークと上海と東京で、中国の古書をもとにした大がかりな実験が行われた。そのことは、中谷宇吉郎「立春の卵」にくわしい。この場合の立春は、場所によって異なつた時刻であり、その時、実際に卵が立つたという記事が新聞に載つた。

八十八夜、二百十日、二百二十日までの日数を数える第一日目という役目も立春にある。立春を過ぎて初めて吹く南からの強風を春一番と呼ぶ。

禅寺では立春の早朝、門に立春大吉という紙を貼る。江戸時代、京都では正月に、恋文の代筆である懸想文売りがいたが、今でも須賀神社では立春の前日である節分に、覆面の懸想文売りが現れる。

太陰太陽暦では雨水を含む月を正月とする。立春は朔とは無関係で、旧暦の元日に重なる機会は少ない。重なる「朔旦立春」と呼ばれ、とくに縁起がよいとされる。次の機会は二〇三八年、南海トラフの巨大地震が起こる時期として予測された年にあたつている。